

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	乙姫の小函：小説
Author(s)	そめと
Citation	龍南會雜誌, 155: 93-99
Issue date	1914-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6380">http://hdl.handle.net/2298/6380</a>
Right	

餘る有難味を感じないわけに行かなかつた僕は亦これから先の旅行をも想像して見た。しかし同様につまらないだうと云ふ結論に終つた。それは完全な設備になる、動いて行く家屋のやうに改良されるかも知れない。しかしそれに乗つて行く人間は汽車に慣れて、それだけの安樂さもあると思はぬほど汽車の恩を忘れさうに思はれてならない。そうなると思はれたのであつた。しかもさう考へて居るのは自分だけのやうに思ふと尙ほ更ら心地が良かった。

もう米原を過ぎた。名古屋も程ない事である。名古屋から乗り換へるともう郷里に近い。旅程も終りになつた。僕も此の紀行の終りを結ばう。僕等も長い旅で疲れた。見る人も長い紀行で御疲れの事と思ふ。た互ひに今度はこれで東西に別れよう。(終り)

## 乙 姫 の 小 函

一部三年丙組

そ

め

と

浦島。 少年

乙姫。 人魚の化身、面長の凄艶なる美女。眼細くして、やゝ吊れり

夜の海底——舞臺裝飾は圖案的なるを要す。

龍宮の一部。幽暗なる薄明を透して、細長き海草は縦に編<sup>たて</sup>を織り、朱欄を廻らせる廣き廻廊、右方より斜めに其の角を現はす。高き椽下は暗くして定かならず。迥かに海月の青き燈の、ゆるやかに明滅するを見る。

浦島。(たゞ一人、廻廊に立つ)長い眞夏の痴けた夢から、ふと眼醒めたときの遺瀨ない晝の白さか。たばろに濕る春のけはひに、獨り眠られず瞋る窓の障子の、心重たい夜の白さか。思へば此處へ來てから、もう何日になることぢややら、晝もなければ夜もない、唯だ黄昏のこの痛さ戀しさ、ほに懷しさ……あのま、あわかな乙姫様も、何故か私には、そら怖ろしい氣がしてならぬ。そら怖ろしい氣がしてならぬ。黒い息吹の、接吻の、額に香ふ切なさ。又ゆれ髪のしめりの、面を撫でる疼き心。さても怪しいは、あの眸の深さぢや。長い睫毛のしつとりと濡れて輝く眸の深さ……。あの眼で凝と見られる時、いやもう快い惱ましさに呼吸も窒り、悦びと嘆きに胸も裂けるわ。愛と憎しみが同時に湧くのぢや、生と死が同時に迫るのぢや。あゝ其の苦しさは！……私は如何しても、あの眼に抵抗ふことが出來ぬ。私は如何しても、あの眼を逃れることが出來ぬ……

たゞ海月が、又あのやうに、ぼーッ、ぼーッと青い燈をつけたも消したりして居る、今は矢張り、夜なのぢやつた(間) 什うでも私は——そうぢや、逃れて出ねば

(乙姫。靜かに、されど取亂せし姿にて右手奥より出づ。眉はキリ、と怒りに吊り、下唇はいやらしいく垂れて慘酷なる *simlichkeit* を現はす。浦島を認むると同時に、平常の清艶なる美貌にかへる)

乙姫。又しても、其處でた前は何をして居やるのぢや。捕へがたない海底の晝の光に、うつら／＼と何時も唯だ、半睡んで居やつた私の小さな貝が、夜のけはひにちら／＼と、什うやら美しい眼を醒したさうな……。浦島さま、私はた前の其の寂しうに立つた姿が、ほんに／＼怨めしいぞね

浦島。(見返りもせずに) あゝ歸りたいことぢやな……！

乙姫。た前は、それでは——私が嫌ひになりやつたのぢやな。それを今迄氣が附かなんたとは、いゝ何といふ私は白痴！　したが、あの時た前は何と言やつた。まさか忘れはしやるまいの

浦島。あゝ歸りたいことぢやな……………！

乙姫。ね、まさか忘れはしやるまいの？——それでは言うて聽かそぞね（一語一語に力を込め）例令、生命を償<sup>あたひ</sup>しても……………（じつと、浦島の眼を瞞<sup>あや</sup>む）

浦島。（ゆるく夢の如く）例令、生命を償<sup>あたひ</sup>しても……………

乙姫。貴方の紅い唇を……………

浦島。貴方の紅い唇を……………（眞直に正面を見詰めながら、ふら／＼と歩む——乙姫の眼は蜥蜴の如く美しく媚び、その唇は雛罌粟の如く紅く開く。）

乙姫。浦島さま……………

浦島。（倒れかゝり頭を乙姫の胸に寄す。強く抱き締められながら深く小く）あゝ！……………（突然、身悶<sup>もど</sup>ををして乙姫の腕より離る）いやいや歸るのぢや／＼！

乙姫。たや如何しやつたのぢや。私の胸にたこせの毒針<sup>どくし</sup>でも刺<sup>さ</sup>つて居たと言やるかや

浦島。歸りたや／＼

乙姫。それでは猶<sup>やう</sup>且、私が嫌ひになりやつたのぢやな——いゝ怨めしいぞね！

浦島。いや／＼左様では……………

乙姫。然<sup>そ</sup>うでなければ、はて何故<sup>なぜ</sup>そのやうに

浦島。(苦しげに喘ぐ)……私は、私は、たゞ貴方が恐ろしうて……

乙姫。まあ！……(暫くして、にやりと笑ひ)浦島さま、私の眼を見て見やいの

浦島。(顔を外<sup>そと</sup>向けて弱々しく)嫌ぢやー……(乙姫の眼は嬉しげに、浦島の顰<sup>しりぞ</sup>たげなる横顔に注がる。

間。)

乙姫。それでは如何でも、た前は歸りやる氣かや

浦島。(頷く)

乙姫。如何でも？……いゝ勝手にしやーはゝ今言ふたのは嘘言<sup>うそ</sup>じやぞね。氣に障<sup>さへ</sup>てたもんなや。なんの、た前が其のやうに言やるのなら、歸して上げいで何とせう。したが夜は此<sup>この</sup>様に、鳥賊<sup>いか</sup>の墨汁<sup>すみ</sup>よりも黒い程に、せめて黎明<sup>よあけ</sup>までは待ちやいの、せめて黎明<sup>よあけ</sup>までは――はて未だこれでも機嫌<sup>なは</sup>が治らぬかや。さゝ、ちやつ／＼と機嫌<sup>なは</sup>を治して、早う笑顔を見せてたもいの

(浦島、欄に倚る)

乙姫。そうちや、(振返り)誰か居やらぬか！

(はい、と遠くに答へ。程なく魚冠を戴<sup>め</sup>きし女童<sup>わらわ</sup>出つ)

女童。御召で御座りましたか

乙姫。あゝ、何日た前に預<sup>あづか</sup>り置いた小函<sup>こはこ</sup>があらう。あれを今直ぐに持て來て呉りやれ

女童。(これにて退る。間。小函を持來り再び去る。)

乙姫。(浦島に)これを記念<sup>かたみ</sup>に上げうぞね。したが歸る迄は、決して如何なことがあらうとも、この蓋ばかり

は開けやんな、二人の幸福を思ふなら……

浦島。(振り返り、頷く)

乙姫。さ、今宵こそは二人の最後ぢや程に、せめて仲よく話して別れやうぞね(小函を右手に、浦島の左に列びて欄に倚る)……あゝ海月が又あのやうに、頼りない孤獨の青い息をついて居る。彼等は私を猜んで居るのぢや。いゝね、私は知つて居る、彼等は私を呪つて緑の悲しい曙を呼んで居るのぢや。曙が來たら、自分等の死ぬのも知らずに——しかし、夜は未だ容易に明けそうな氣色もない(下を見下す)ね、暗いことぢや……。それでも暗黒に漂ふ光の故か、あれ白い砂がちら／＼と、網の目のやうに搖れて居る(浦島も黙したるまゝ下を見る)海底の暗い秘密を怖れて、銀色の泡の鈴が、幽かに顫へて鳴りながら上つて行く……。見やれ、彼處どころに姫が、こせか唯一尾、藻の葉に止まつて搖いで居るぞね。たは方夫を戀うて眠られぬまゝに、まじ／＼と夜の光を瞞めて居るのであらう

浦島。たつた一輪、遅れ咲きの——(ふと、口を嚙む)

乙姫。たつた一輪、遅れ咲きの？

浦島。……たつた一輪遅れ咲きの赤い花が、冷たい秋の朝霧に、顫うて居るやうなな、やかさ

乙姫。さ、その赤い花を、た前は憐れと思やらぬか

浦島。……

乙姫。あゝ、明日から長い晝と夜とを、たゞ美しい思出の薄衣に、うち顫ひながら暮らすのかや——せめてた前が、私を戀して居たと言ふて給るなら……

(この時、舞臺次第に暗くなり、幽かに聞える千鳥の曲——violinspiel)

あゝ千鳥が……。渚に光る波の亂れを、綾に縫うては啼く磯千鳥、ほら臆れてか彼の夜も、何處としらに此のやうに、ビョ／＼ビョと啼いて居たではないかいの……。

(間。千鳥の曲)

浦島。……ほんに彼の夜ばかり、怪しい夜はなかつたな。月は、海から立上る青い香に、ぐんにやりと他愛もなく酔ひつづれ、海月は猫の腫の縁に、深く呼吸して静と聲を吞んで居た。私は、あの時ぐらひ、故わかの幸福と沈黙とに胸を壓されたことはない(嘆息)すると何處かで、私を呼ぶ聲がした——(この時、次第に元の薄明に歸り、音樂も次第に消え行く)たばろかに光る水の面に、濡髪の亂をしつとりと肩に、女が謎のやうに微笑んで居たのぢや。その顔には潮が匂うて居た。その膚には夜光虫の光があつた。私は自分の名を再び聞くと、急に熱い霧にでも包まれたやうで……水に進み入つたとき、黒い海が足の下で大きく揺れたわ。それでも、たばろかに海の胸に乗つて、生命を力を……あゝ吸うたのぢや。あの赤い唇から！……………

(靜かに聞き居たりし乙姫、この時にやりと笑ふ)

浦島。……(猶ほ虚空を凝視したるまゝ。嗟嘆)

乙姫。(極めて平靜に、しかし稍や笑ひの圓味を帯びて)浦島さま

浦島。(夢より醒まされし如く乙姫を見る。而して忽ち、或る期待の壓迫に悩む)

乙姫。(低く壓しつけて)函を開けて見や

浦島。

乙姫。函を開けて見や

浦島。ぢやといつて、開けては悪いと……

乙姫。よい程に、開けて見や、

浦島。ぢやといつて——（幽かに嘆息）二人の幸福のためにも……

乙姫。（欄の上にて、自ら函の紐を解き）さ、開けて見や。

浦島。（この言葉にて、左手を出し右手を出し、函の蓋に手を掛く。暫くは、彼の顔と手と劇しくうち顫ふ）

乙姫。さ、開けて見や

（浦島、思切りし如く蓋を開く。一團の白煙、音を立て上り、函は其のまゝ下方に落つ）

浦島。あは……（喉の詰りし如き聲して腰を落し、後方に手をつき倒る）

乙姫。（顔を掩ひて、ゆるく欄によりつゝ、横様に倒る。）

人魚。（白煙の中に現はる。大女。その髪は縮れて亂れ、その腰は太くして海藻に掩はる。卑しげなる赤き頬

しまりなく垂れし唇、淫慾に輝く小さな眼——）

わへ、私が眞實の乙姫ぢやわ！

（急に幕）